時事新報

獨逸老帝崩御

獨逸老帝ウヰルヘルム陛下には昨九日午前八時三十分を以て崩御せられ給る旨別項にも記するが如し帝の崩御あるに於ては日耳曼帝國臣民の悲哀は申すまでもなき事にて我々外國の臣民たりと雖も其訃音に接しては衷心の念の已み難く、交親國民は情に照らし誼に訴へて斯くこそ有る可き者なれば凡そ地輿の上に於て崩御の計音致電して傳はる處何れも悲愁の思ひを爲さゞる者はあるまじき

然りと雖も老帝の壽齢本年既に九十有一なれば天命に於て憾なりと云ふ可らず將た人事々業上に歷數より之を言ふも古來各國に帝王中老帝の如く能く偉大に功を奏して勢威と內外に輝かしたる者あるを聞かず往時當西建國の基礎堅からずして佛蘭西の爲に屢々兵禍を蒙むるに當りては帝の苦心慘念如何許りなりしならんかと我輩當時の史乘と閱して轉た感慨の切なるを覺えざりし程なれども後ち次第にして帝は民力と衰ひ國力と强しビスマルク、モルトケ諸臣の補翼を受けて千八百六十六年には墺地利をサドワに破り尋て七十年の戰ひにはナポレオンをセダンに擒にし是に於て日耳曼帝國の基礎始て成り爾來今日に至る迄歐洲和戰の大權と一身に掌握し日耳曼の聲威四隣に輝光を發の强暴なる、佛の傲悍なる、智謀瞬時す所ならんと欲すれども老帝の炯眼に畏遲して敢て遽に發せざりし其威光大なりと云ふ可し全威全權斯くも到らざる處なき榮華を極めたる人生の至境は老帝に於て盡きたりと申さんのみ

抑も〳〵又一方より考ふれば歐洲列國の形勢は日に月に危急に迫るものにして東方事件の爭ひは全歐大戰の媒たらんと識者の既に憂ふる所なれば帝が此間に不安の歐洲を永遠、跡に見捨てんと軫念に堪えざりしは我輩の窃に信ずる所あり特に皇太子の病勢も今日は在りては未だ快復の報に接し得ざるのみならず時に老帝に先だちて皇太子の訃音を聞くとあらんかと世人一般憂慮したる程なれば今後或は第二の凶報に會するなきと期し難し聞て今の皇太孫の天資聰明剛毅なる世に聞れなき事實なれども尙は未だ妙齡なれば其威望皇太子に及ばざるは勿論にして特に補弼の臣たる可きビスマルク、モルトケの諸人殘餘の生命、將に朽ちんとするの今日なれば爾今爾後歐洲列國の形勢もこれに連れて如何に成行く者ならんか掛念に堪えず左れども此等は畫策の問題にして早急に之を論ずる能はざれば唯愛に喪を吊らひ我々外國臣民の敬意を表するの傍ら恭り老帝の傳記を略敍し諸君と與に併せて其事業の大なるを仰ぶがんと欲するなり

故獨逸老帝

帝は千七百九十七年三月廿二日に降誕せられ皇父はフレデリック ウヰリヤム第三世、皇母はメクレンボルクストレリツヤ侯國のロイ后妃にして幼年に在ては武官さるの教育を受け千八百十三年及び千八百十五年の兩戰爭（佛蘭西との戰爭）にも出陣ありたり千八百四十八年ポメラニヤ（普漏西の一州）知事に任じ千八百四十八年佛國の革命に引續き普漏西に內訌の起りしまでは其任にありたるも革命の際暫らく遁れて英國に隱れ同年間もなくコンスチチユーエントアッセンブリーの議員に撰擧されさるを以て伯林に還りて其年六月議員の席を占め千八百四十九年六月普漏西兵の元帥となりてベーデン侯國の革命兵と戰ひ千八百五十八年皇兄フレデリック ウヰリヤム第四世の攝政に任じ貴族黨を排斥し て自由改進の政略を執り千八百六十一年皇兄の太子なくして崩せらるゝに及び同年十月十八日其後を承てコングスベルクに於て普漏西國王の位に即かれたり帝れ即位後に執りたる政略は即位前に帝に望みを屬し居る人々をして失望せしむるに至りたるい外ならず即ち帝は位に即くや直に國會との間に爭端を開き爾後紛議に紛議を重ねて千八百六十二年ビスマーク公を總理大臣としたる後ちは殆んと內亂を惹起すべ死勢に迫りさるよ恰も好く當時墺地利普漏西の兩國相謀りて丁抹國と兵を交ゆるに至りたれば人心自ずら內國の事を黙るに暇あらずして、斯くて此戰爭は終りたる其後は帝の位置漸く固く民心の不平も平穩に歸したりされど帝は素より丁抹の一部を其版圖に加ふるを以て滿足するものにあらざればビスマーク公に輔佐され斷然奮起して今一層大望を企て兵力と以て全日耳曼を統御するの位地に昇らんことを謀り數年間專ら兵備に力を盡し千八百六十六年の初頃は早や既に其計畫熟して何時にても實施し得るの有樣となりたれば先づ伊太利と同盟の約を結び日耳曼北部の小國に最後の御判書を贈り大軍を動ゝして以て國威を示し同年六月墺地利に對して戰爭と布告し少時戰鬪の後ち遂に墺地利より和と請ふよりさり此戰爭には帝及び皇子にも常に出陣ありて之に使用しさる新發明の針打銃は墺軍中に恐怖を惹き起して其の將官をして斯の如き銃器にい到底敵もべうらすと云はしむるに至りたり

斯て千八百六十七年に普漏西王は北日耳曼聯邦の首座を占むることとなりたるが此聯邦の二十二箇國にして其人口總計二千九百萬あり夫より千八百七十年に至り西班牙の王位をホヘンツヲレン公に繼承せしむるの議につき普佛の間に紛糾を生じ爲めに佛國の人心を激昂せしめたるを以て佛國は普國に對して宣戰と布告し次きて兩國の間に戰を開きたるも遂に普兵の勝利となり巴里を圍て普國より取極めさる迄に普兵の勝利となり遂に和約と締結せし爾來今日に至る迄歐洲和戰の大權と一身に掌握し日耳曼の聲威四隣に輝光を發の强暴なる、佛の傲悍なる、智謀瞬時す所ならんと欲すれども老帝の炯眼に畏遲して敢て遽に發せざりし其威光大なりと云ふ可し全威全權斯くも到らざる處なき榮華を極めたる人生の至境は老帝に於て盡きたりと申さんのみ

抑も〳〵又一方より考ふれば歐洲列國の形勢は日に月に危急に迫るものにして東方事件の爭ひは全歐大戰の媒たらんと識者の既に憂ふる所なれば帝が此間に不安の歐洲を永遠、跡に見捨てんと軫念に堪えざりしは我輩の窃に信ずる所あり特に皇太子の病勢も今日は在りては未だ快復の報に接し得ざるのみならず時に老帝に先だちて皇太子の訃音と聞くとあらんかと世人一般憂慮したる程なれば今後或は第二の凶報に會するなきと期し難し聞て今の皇太孫の天資聰明剛毅なる世に聞れなき事實なれども尙は未だ妙齡なれば其威望皇太子に及ばざるは勿論にして特に補弼の臣たる可きビスマルク、モルトケの諸人殘餘の生命、將に朽ちんとするの今日なれば爾今爾後歐洲列國の形勢もこれに連れて如何に成行く者ならんか掛念に堪えず左れども此等は畫策の問題にして早急に之を論ずる能はざれば唯愛に喪を吊らひ我々外國臣民の敬意を表するの傍ら恭り老帝の傳記を略敍し諸君と與に併せて其事業の大なるを仰ぶがんと欲するなり

○田邊元老院議官　高知三月十日午後時發　田邊元老院議官本日來縣せられたり

電報

○秋田縣二郡の聯合會　秋田三月十日午後特發
今日南秋田河邊兩郡の聯合郡會を開設したり

○九州鐵道會社熊本福岡株主總代の會議　佐賀三月十日午後特發
高橋九州鐵道會社長の處分に就て兼て不平なりし熊本福岡兩地の株主總代十名は來る十三日を以て久留米に總會議を催ふす筈なり

○第三大瀧丸　大津三月十日午後特發
兼て造船着手中の鐵船第三大瀧丸は今日船卸しを爲したり

○陸奥宗光氏　大坂三月十日午後特發
陸奥宗光氏は今朝來坂して當時滯在中なり不日御勢路を經て鄕里和歌山へ赴く筈なり

○關西高等官の大懇親會　大坂三月十日午後特發
明日兵庫の御影村に於て小澤高嶋の兩中將と始め各高等將校幷に第四軍管の府縣知事書記官裁判官等合計六百餘名は一大懇親會を開く都合にて軍樂隊をも聘する筈なり

○千田貞暢縣知事　廣嶋三月十日午後特發
千田本縣知事は昨夜歸縣したり

○福井地方の霖雨　福井三月十日午後特發
當地は此の程より霖雨降り續きて諸川爲めに大水せり

○銅鑛縣有志者の上京出發　長崎三月十日午後特發
本縣下西彌凰郡二百三十餘名の總代人石橋源吉氏は內治外交の事件に關し其筋へ建白せん爲め本日出發上京の途に着けり

○神戸電報　三月十日午後特發
一公一伯　毛利公井上伯は山口に向て本日午後三時當地を出立せり

山陽鐵道線路の檢分　井上鐵道局長は山陽鐵道會社副社長と共に官民懇親會に臨み且つ沿道の停車場を檢査するよし

○臨時縣會　臨時縣會は矢部氏の露國の

○露國の

ビスマ

もの）に

以て本日

○獨逸皇

獨逸皇

甚だ氣

○獨逸皇

獨逸皇

獨逸皇

に捺印す

○獨逸皇

獨逸皇帝

召されな

○土耳格

土耳格政

は法に

○明宮殿

遊就館へ

○哩は里

項中哩メ

○宮內省

獨逸國皇

二十一日

明治

○獨逸皇

三十分崩

報ちり

○吊禮

電報ちり

領する同

る同國公

演其他の

りと

○葉貴頭

樺衛の好

大臣の入

に今は長

に居たる

租稅は重

盛を謀る

國にその

來て部

支出を起

可らず大

し天下浮

こと者局

耳と後た

騙る强と